

巻頭言

福山平成大学 福祉健康学部
福祉学科長 岡部 真智子

福祉健康科学研究の第20巻が完成しました。本学開学30周年の年に、20巻目の学部紀要ができたことを考えると、本学において福祉健康学部が築きあげてきた歴史の重みを感じます。

今回、20余名の方からご投稿いただきました。授業教材の作成や学内業務等が多忙な中、寸暇を惜しみ、論文を執筆・投稿されたことと思います。フランスの生物学者パスツールは、『発見のチャンスは、準備のできた者だけに微笑む。』と述べています。確かに、準備がなければ発見のチャンスありません。では、どのくらい準備をすればよいのか。豊富な時間を準備に費やせば、それに越したことはありません。

ただ、どうしたら準備の時間がとれるのか、これは、論文を執筆する者には研究の間を立てるのと同じくらい大きな課題かもしれません。大学教員は、研究・教育・学内行政・社会貢献を担います。すべての時間を合わせた中で、研究が占める割合はどのくらいでしょうか。今回投稿された論文を読むと、普段の教育内容との重なりが厚い論文が複数あります（研究の専門領域を教授するのが大学の教員なので、当然かもしれません）。教育と研究が重なる分、それぞれを別に取り組むよりも研究が占める割合は高くなる（高めやすい）傾向にあると考えられます。

一方で、大学で教授する科目と研究内容の重なりが薄い場合、研究の割合が低くなるかもしれません。ではその中でどれだけ効率的に研究に取り組むのか。これに日々苦心している私には、その答えとしてお示しできるものではありません。ただ多くの研究業績を持つ方の中には、教育や学内業務にも長けた方もおられ、こうした方からは何かヒントを得られるかもしれません。今年2年目を迎えるコンベルサラウンジのテーマの一つとしてはいかがでしょうか。

福祉健康学部の研究は、福祉、教育、健康、スポーツを学問の基盤としながら、現代社会を背景に一層広がりを見せています。研究には、複雑化・多様化する社会において人々の幸福を高めるために貢献できることが求められ、それを実現することが、社会において福山平成大学の存在意義を示すことにつながります。その中心的役割を果たすために、今後ますます本紀要が重要になるのではないのでしょうか。

最後になりますが、福祉健康科学研究第20巻を発刊するにあたり、投稿していただいた先生方、査読いただいた先生方、また紀要委員長の森澤桂教授をはじめ紀要委員の先生方には多大なるご尽力をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。